

# 自然界に見る「編み」—編物起源説明の手がかりとして—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Matsunaga, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00050689">https://doi.org/10.24517/00050689</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 自然界に見る「編み」 —編物起源解明の手がかりとして—

松永 篤知

(金沢大学資料館・埋蔵文化財調査センター)

### 1. はじめに

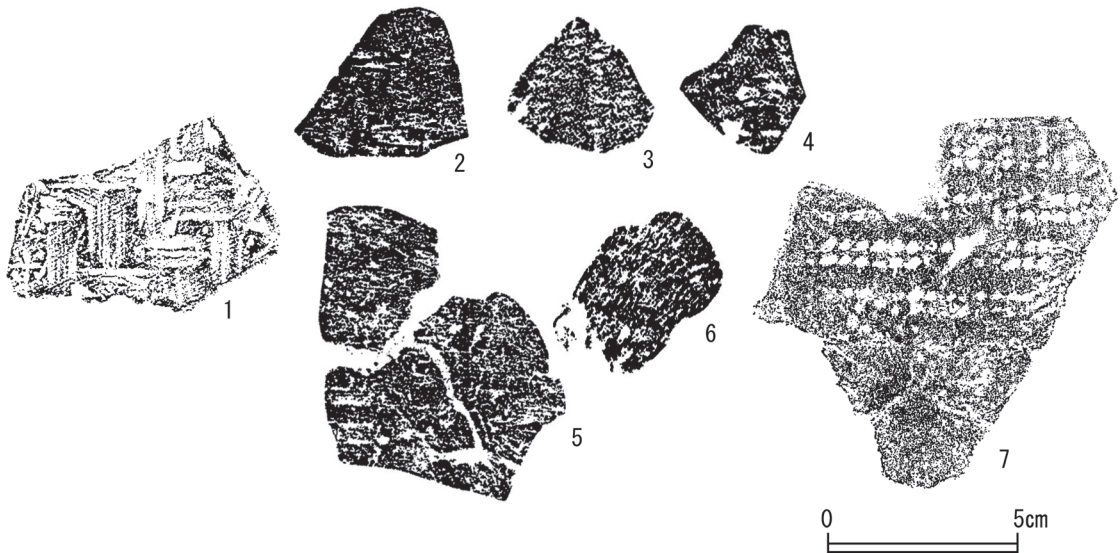
近年、日本考古学において、縄文時代の編物研究が進展している[工藤ほか2017、松永2013など]。その背景には、低湿地遺跡の調査によって得られた実物資料が相当数蓄積したこと、編物の素材植物の同定技術が進歩したこと、敷物圧痕分類や圧痕レプリカ法の普及によって圧痕資料の価値が認められるようになったことなどがあるものと思われる。

しかし、それ以前、すなわち旧石器時代の編物について論じる者は皆無に等しい<sup>1)</sup>。縄文時代草創期における編物の技術水準から見て、日本列島における編物の出現が旧石器時代に遡ることは疑いようがない。縄文時代草創期に遡る編物の実物資料は現時点で見つかっていないが(腐朽しやすさから考えればあまり期待できないだろう)、土器底部の敷物圧痕から、広義の網代編み・もじり編みによる平面的な編物が該期に

存在したことは確実である(図1)。さらに、草創期の縄文土器にカゴを想起させる器形・文様が見られることから、該期における立体的な編物の存在も想像に難くない[松永2008]。

それが、旧石器時代ともなると、縄文時代草創期以上に編物の実物が出土することは期待できず、そのうえ土器が存在しないため敷物圧痕のような圧痕資料もまず見つからない。それゆえ、考古学において起源論は基本的かつ重要なテーマの一つであるにもかかわらず、編物の起源については、近年誰も触れることすらないのである。そうは言っても、編物の変遷を通時的に研究しようとする場合、最初期にあたる旧石器時代の編物の問題は、決して避けては通れない。

さて、自然界にも「編み」は見られる。動物の巣の類が代表的であるが、様々な生物に「編み」と呼ぶべき行為・現象が認められるのである。そこから一歩進



1: 埼玉県打越遺跡の網代圧痕(2超2潜1送 ※経緯3本組か)  
2~6: 静岡県仲道A遺跡の網代圧痕(2: 3超3潜1送、3~5: 1超1潜1送の類、6: 超潜送不明)  
7: 鹿児島県三角山I遺跡の絡め編み圧痕(広義のもじり編み、絡み方向R)

図1 縄文時代草創期の編物資料(縄文土器底部の敷物圧痕)  
[漆畑・澁谷ほか1986、木村・中島1988、藤崎・中村2006]

んだものが、人類が生み出した「編物」である。すなわち、旧石器時代の編物は、自然界の「編み（編物類似行為・現象）」と、縄文時代草創期の編物の間に位置づけられるのではないだろうか。

そこで本論では、自然界に見る「編み」を取り上げる。ただちに旧石器時代の編物の姿が明らかになるわけではないが、編物起源研究の第一歩として、事例収集と若干の比較検討を試みたい。

## 2. 本論の基本的視点

考古学において、編物資料を見る際に基本となるのは、実物・圧痕を問わず、編み方・器種・素材の3要素である[松永 2013]。いかなる編物であっても、必ずこれらの相関関係によって個が成立しているからである。考古資料の場合、各編物の出土状況や共伴遺物などの情報も加えて最終的な評価をおこなうことになるが、いずれにしても編み方・器種・素材が基本となることに変わらない。

3要素の特徴的な組み合わせとしては、縄文時代の北陸地方などにおける前期以降の「広義のもじり編み-カゴ-針葉樹」や、縄文時代の東北地方などにおける晩期の「広義の網代編み（体部ザル目編みの類、底部網代編みの類）-籃胎漆器-タケササ類」といったものが好例である。その背景には、各地域・各時期の技術や環境などがあるものと推測される。このような構成要素の関係性は、自然界においても少なからず当てはまるはずである。

そこで本論では、自然界の「編み」についても同様の視点を基本とし、各生物が、編物に類似したものをどのように作っているのか（編み方）、具体的に何を作っているのか（器種）、素材に何をを用いているのか（素材）を中心に見ることとする。そして、自然界の「編み」の諸要素を、縄文時代草創期における編物のそれと比較することで、両者の中間的存在であろう旧石器時代の編物がどのようなものであったかについて、ある程度推測してみたい。

## 3. 自然界に見る「編み」の諸例

それでは、自然界の「編み」について、具体例を見ることにしよう。筆者の管見に触れたものだけでも[小海途・和田 2011、座間 2016、杉山 1942、センテンス 2002、畠 2014]、実に多くの動植物に、編物類

似の行為・現象が認められる（図2）。以下、生物ごとにその詳細を述べる。

### 鳥類

鳥類の巣作りは、自然界の編物類似行為として最も容易に思い浮かぶ事例であろう。特に小鳥の類が、木の枝や草の葉・茎・根、蔓などを用いて、カゴ類に似た巣を作ることが知られている。

全ての鳥が編物に似た巣を作るわけではないが、和田岳氏による巣のつくり方分類[小海途・和田 2011]では、「組み立てる (assembling)」のうち「組み合わせる (interlocking)」の類が該当する。これは、編物で言えば「組む (広義の網代編み)」や「絡める (広義のもじり編み)」などに相当しよう。仕上がりの構造は乱れ編み様であるが、鳥たちは自身の嘴を巧みに使って、何度も巣材を交差させたり絡ませたりする。

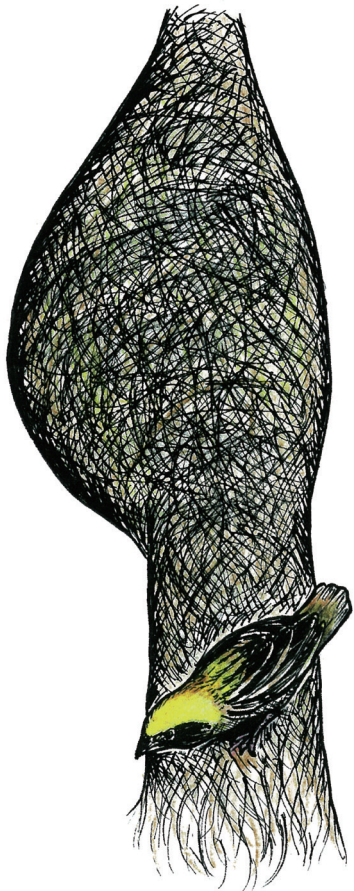
特に、アフリカや南アジア・東南アジアに分布するハタオリドリ (weaver bird) の類は、最も高度な「編み」をおこなう例である[小海途・和田 2011、杉山 1942、センテンス 2002]。この種の鳥は、草の葉を裂いたものなどを細かく出し入れして、球形やトックリ形の巣を作り上げる。その完成度は、もはや編物類似行為の域を超えている。

### カヤネズミ

鳥の巣によく似た球形の巣を作る小動物として、カヤネズミがいる[小海途・和田 2011、杉山 1942、畠 2014]。これは、頭胴長約6cmの日本最小<sup>2)</sup>のネズミで、学名はまさに「小さいネズミ」を意味するミクロミス・ミヌツス (*Micromys minutus*) である。このネズミは、イネ科やカヤツリグサ科の植物の葉を葉脈に沿って噛み裂き、その葉を茎から切り離さずに編み込んで（編物の「組む」や「絡める」に相当）、乱れ編み様を呈した球形の巣に仕上げる。この巣には編み目が粗いものと細かいものがあり、休憩には両者が使われるが、子育てには後者のみが使われるという[畠 2014]。

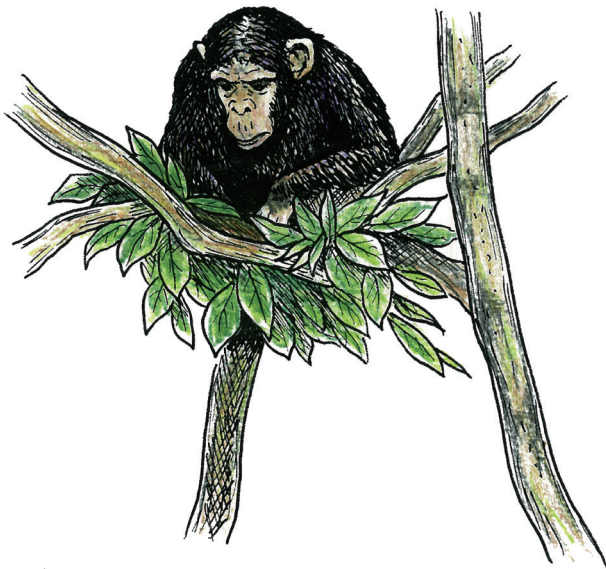
### 類人猿

ヒトに最も近い編物類似行為の例としては、野生の大型類人猿が木の枝を組んでベッドを作ることが

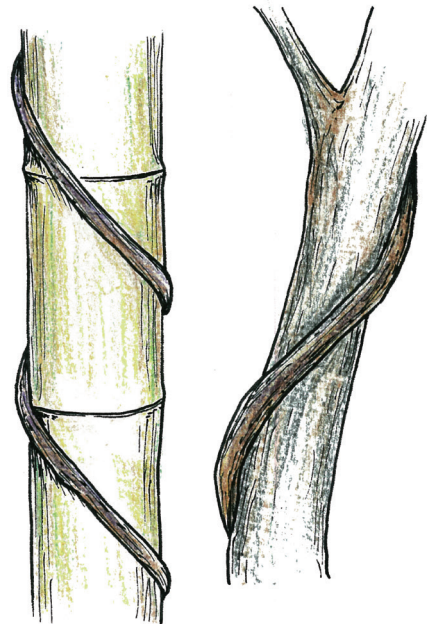


カヤネズミ

鳥類 (バヤハタオリドリ/キムネコウヨウジャク)



類人猿 (チンパンジー)



蔓植物 (フジ属)

図2 自然界に見る「編み」の諸例 [筆者作成]

知られている [座間 2016、センテンス 2002]。アフリカのチンパンジーの例では、葉のついた木の枝を「曲げる」・「折る」・「切って置く」ことにより、毎日樹上に皿形（言わば半立体）のベッドを作るという [座間 2016]。これは、編物の「組む」に相当するもので、ヒトによる初源期の編物が、条材を単純交差させるものであったことを想起させる<sup>3)</sup>。

### 蔓植物

フジやクズ、マタタビなどの蔓が他の植物に自由に巻きつく姿は、条材を絡めたり巻いたりした編物を彷彿とさせる現象である。蔓の巻きつき方には左右の別があるが、それも編物に見る左右の別（もじり編みの絡み方向など）と共通する。

図3は、ササの稈を複数束ねるように蔓（ヤマフジ）が巻きついた例である。これなどは、ある意味カゴ類の巻き縁を想起させよう。



図3 ササの稈に巻きつく蔓  
[2017年4月、金沢市内にて筆者撮影]

### 4. 若干の考察

以上のように、自然界には様々な編物類似行為・現象が認められる<sup>4)</sup>。これらを踏まえた上で、縄文時代草創期の編物との比較検討をおこない、さらに旧石器時代の編物についても考えてみたい。

自然界において種々の動植物が見せる編物類似行為・現象をまとめると、(1) 作り方は、編物の「組む」・「絡める」・「巻く」などに類似するが、概して乱れ編み様を呈し、規則性が弱い、(2) 立体的または半立体的な巢やベッドなどを作る、(3) 素材には、丸のままを基本とする木の枝や草の葉・茎・根、蔓など

が用いられ、中には葉を裂いたものなどが含まれる、となろう (図4 上段)。

一方、縄文時代草創期の編物は、これまでの研究 [松永 2008 など] から、(1) 広義の網代編み・もじり編みを規則的におこなう、(2) 平面的な編物を確実に作っており、その技術水準や類推資料などから見てカゴのような立体的な編物も作っていた可能性が高い、(3) 素材には、各種植物を齊一的に割り裂いたものを用いる、とまとめることができる (図4 下段に相当)。

そうすると、旧石器時代の編物というのは、その中間の段階 (図4 中段)、(1) 乱れ編み様から若干の規則性が芽生えたような編み方、(2) 立体的・半立

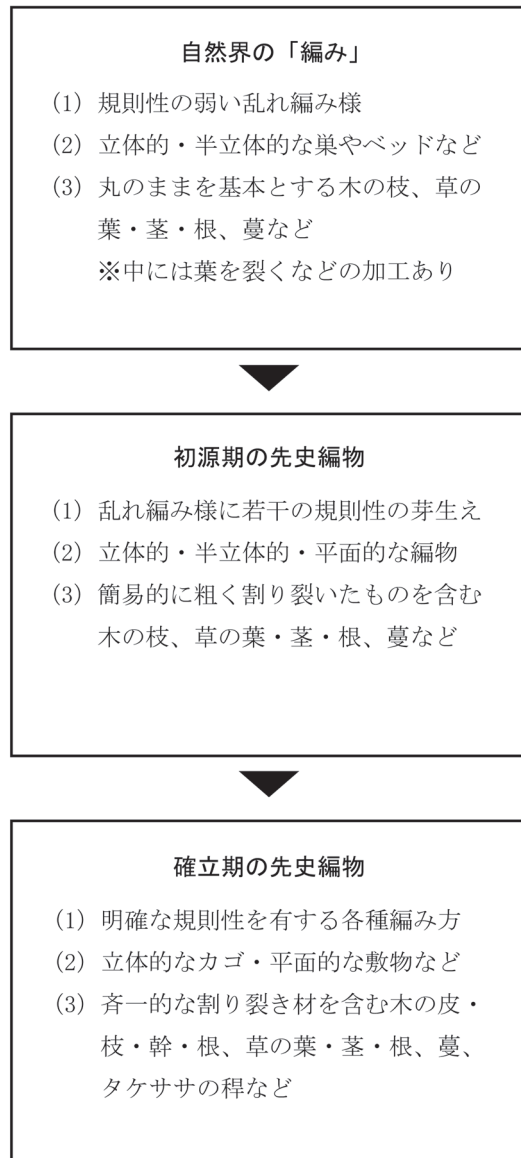


図4 自然界の「編み」と先史編物の各段階  
[筆者作成]

体的・平面的な編物を作る、(3) 素材には、各種植物を粗く割り裂いたものを用いる、といったところになるだろうか。

なお、海外の例ではあるが、ヨーロッパからロシアにかけての後期旧石器時代遺跡において、もじり編みの編物や縄などの圧痕資料（焼けた粘土）が見つかっている [加藤 2001, Adovasio et al. 1996]。これらを積極的に評価すれば、日本列島の後期旧石器時代においても（特に終盤には）、編物技術はすでに縄文時代草創期とあまり変わらない水準に達していた可能性がある。

しかし、少なくとも最初期の編物は（日本列島を含む世界各地の編物の起源地がどこであるか、また編物の出現が旧石器時代のいつであるかはともかくとして）、図 4 中段と同じかそれに近いものであったと考えておきたい。

## 5. おわりに

以上、これまでの考古学的編物研究とは異なる視点で、先史時代の編物について考えてみた。

真の編物起源論にたどり着くまでの道のりは遙かに遠いが、通時的な編物研究を目指す上では避けられない問題として、今回あえて旧石器時代の編物へのアプローチ法を試行した次第である。

本論を出発点として、これまでよりも広範囲（動植物学など）に視野を広げた編物研究を展開していきたい。そして、いつの日か日本列島や東アジアの編物の起源を、より具体的な形で明らかにできれば本望である。

もちろん、今後日本列島および周辺の発掘調査において、奇跡的に旧石器時代に遡る編物資料（編物圧痕を有する粘土など）が見つかることが理想的なの言うまでもない。

## 謝辞

本論は、冒頭から述べている通り、編物起源研究の第一歩としてテーマ設定したものではありませんが、そもそも学部・修士課程ともに多大なご指導を頂いた中村慎一先生が、2002 年のご著書『稲の考古学』の中で自然界（共進化や食物連鎖など）にも目を向けておられたこと [中村 2002] に着想を得ています。今年度、縁あって金沢大学に教員として戻り、先生の新学術領域研究「稲作と中

国文明—総合稲作文明学の新構築—」のメンバーに加えて頂いたことで、近年止まっていた先史編物研究を再開することができました。この場を借りて、改めて中村慎一先生のご指導に感謝を申し上げますとともに、先生のご還暦を心よりお祝い申し上げます。

なお、今回の執筆・投稿の機会を与えて下さった足立拓朗先生、および金沢大学考古学研究室の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

## 註

- 1) 土器起源論でカゴ類に注目したり [小林 2002]、織物起源論で編布を取り上げたりする例 [鏡山 1972] はあるが、編物そのものの起源について研究しようとする例はほとんどない。
- 2) 畠佐代子氏の研究 [畠 2014] によると、カヤネズミは、日本列島では宮城県を北限とする本州、四国、九州に分布するという（海外では、イギリス、スカンジナビア半島南部と東南アジア北部を含むユーラシア大陸中部、台湾）。
- 3) フィクションの話であるが、500 万年後から 2 億年後の地球の姿を描いた『フューチャー・イズ・ワイルド』 [ディクソン・アダムス 2004] に、500 万年後の生物として、草の茎で漁撈用のカゴを編む霊長類「バブカリ (Babookari)」が登場する。本書のバブカリは、乾燥した未来のアマゾン草原においてヒヒのごとく進化したウアカリの子孫で、中が空洞になった球形のカゴを、魚捕りの罟として川に仕掛ける（一種の罟）。現実世界において、ここまで高度な編物利用をする霊長類は、ヒト以外に知らないが、もしかしたら旧石器時代の編物はある段階においてこのようなものだったのかもしれない。
- 4) クモ類の巣（網）もある意味編物に類似しているが、これは各糸をくっつけて作るものであって、条材を「組む」「絡める」「巻く」といった編物と同様の構造は有していない。そのため、本論の検討対象とはしなかった。しかし、旧石器時代人が編物を工夫していく過程で、クモの巣を何らかの参考にした可能性は十分にある。

## 参考文献

- 漆畑稔・澁谷昌彦ほか 1986 『仲道 A 遺跡』大仁町教育委員会。
- 鏡山猛 1972 「原生期の織布」『九州考古学論攷』吉川弘文館 413-485 頁。
- 加藤博文 2001 「シベリア旧石器時代 極寒の住居と衣服」『日本人はるかな旅』第 1 巻 NHK 出版 187-200 頁。
- 木村俊彦・中島宏 1988 「埼玉県滑川町打越遺跡の発掘調査」

- 『日本考古学協会第 54 回総会研究発表要旨』日本考古学協会 22-23 頁.
- 小海途銀次郎・和田岳 2011『日本 鳥の巣図鑑』東海大学出版会.
- 小林達雄 2002「縄文土器起源論」『縄文土器の研究〈普及版〉』学生社 23-60 頁.
- 工藤雄一郎ほか 2017『さらにわかった！縄文人の植物利用』新泉社.
- 座間耕一郎 2016『チンパンジーは 365 日ベッドを作る』ポプラ社.
- 杉山寿栄男 1942『日本原始繊維工芸史』土俗篇.
- センチンス, ブライアン 2002『世界のかご文化図鑑』東洋書林.
- ディクソン, ドゥーガル・アダムス, ジョン 2004『フューチャー・イズ・ワイルド』ダイヤモンド社.
- 中村慎一 2002『稲の考古学』同成社.
- 畠佐代子 2014『カヤネズミの本』世界思想社.
- 藤崎光洋・中村和美 2006『三角山遺跡群 (3)』第 1 分冊、鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 松永篤知 2008「縄文時代草創期の編物技術」『縄文文化の胎動—予稿集—』信濃川火焰街道連携協議会・津南町教育委員会 73-75 頁.
- 松永篤知 2013「東アジア先史時代の植物質編物の研究」『名古屋大学学術機関リポジトリ』(<http://hdl.handle.net/2237/17973>).
- Adovasio, J. M., Soffer, O. & Klíma, B. 1996 Upper Palaeolithic fibre technology : interlaced woven finds from Pavlov I, Czech Republic, c.26,000 years ago, *Antiquity* 70 : 526-534.